

# 高等学校に在籍する聴覚障害生徒に対する 支援の在り方の研究

〈聴覚障害者の高校時代について〉

内山 涼

(福祉学科 2015年卒業)

私は、聴覚障害があり、小学校から高校まで通常の学校で教育を受けてきた。高校時代は学習面や生活面において大変な思いをした。特別支援がない中で、専門的な授業を聞き取ることができない、コミュニケーションに入ることができないというような状況であり、自分が障害を持っていることがとても苦しかった。また、先生や友人に正しい理解と配慮を得ることが出来なかった。このような経験から、通常の高校で学んでいる聴覚障害生徒の実態や支援の必要性について研究をしたいと思った。そのために、聴覚障害者に対して高校時代についてインタビューを行って分析をした。

高等学校に在籍する聴覚障害生徒に関して、鷲尾（2002）は、高校レベルでの支援に関する実態の調査資料は乏しいと指摘している。高校では特別支援教育を受けることが保障されていないため、通常の高校で学んでいる聴覚障害生徒がどこにいるかどうか把握をすることが難しい。そのため、中野・根本（2008）が述べているように、通常の高等学校で学ぶ聴覚障害生徒の情報はほとんど明らかにされておらず、支援のための特別な手立てもごく一部でしか講じられていない。どこで、どのように授業を受けているのか、また、どのような配慮や支援を受けているのかを知る機会がない。このように、通常の高校で学ぶ聴覚障害生徒の様子について明らかにされていない現状がある。

本研究を進めるに当たって、（美濃・鳥越，2007）を参考にした。この論文は、小学校や中学校の学校生活についての語りから、小・中学校での支援の実態や支援を受ける支援ニーズについて明らかにするために行われた。その結果、「学校生活では『友人関係』、『学習』、『障害認識』の3つの領域での課題が明らかになった」（美濃・鳥越，2007）。この論文から明らかとなった課題から高校時代についてインタビューにおける質問を設定してインタビュー調査を行った。

## (1) 調査対象者

本研究の対象者は、通常の高校を卒業した成人の聴覚障害者6名(表1)、20～24歳、男性1名、女性5名である。聴力は全員が100dB以上であった(無回答1名を除く)。聴力100dB以上というのは、障害のない成人の平均聴力である0dBを基準にして、数が大きくなるほど障害は重くなり、ほとんど聞こえていないということになる。また、等級に関しては身体障害者手帳に書かれる等級のことである。身体障害者福祉法施行規則別表第5号で定められており、3級は両耳の聴力がともに90dB以上、2級は両耳とも100dB以上の者となっている。中学校までの教育経歴は問わない。筆者の知人にインタビュー調査の依頼を行い、研究の目的について説明をして承諾を得られた者を対象にした。調査方法として、個人インタビュー2名、グループインタビュー2人1組の2組4名に分けて行った。グループインタビューの1組目(C, D)は特別支援を受けてこなかったインテグレーション経験者の2名であり、もう1組(E, F)は中学校で難聴学級に在籍して特別支援教育を受けた経験のある2名である。

(表1)

	A	B	C	D	E	F
性別	男	女	女	女	女	女
年齢	24	21	22	20	20	22
聴力(右)	100dB	無回答	100dB	120dB	100dB	100dB
聴力(左)	100dB	無回答	100dB	120dB以上	100dB	100dB
等級 <sup>1)</sup>	2級	3級	2級	2級	2級	2級
人工内耳の有無	無	無	無	有	無	無
家族に聴覚障害者がいるか。	兄	弟	いない	いない	両親・兄・叔母	いない
就学前	ろう学校幼稚部 保育園	幼稚園	保育園	ろう学校幼稚部	ろう学校幼稚部 保育園	ろう学校幼稚部 幼稚園
小学校	通常学校	通常学校	通常学校	通常学校	通常学校	通常学校
中学校	通常学校	通常学校	通常学校	通常学校	通常学校 (難聴学級)	通常学校 (難聴学級)
高校	公立	私立	公立	私立	私立	公立
現在の状況	社会人	大学生	大学生	大学生	大学生	大学生

<sup>1)</sup> 筆者が、回答した聴力を、身体障害者福祉法施行規則別表第5号で定められている聴覚障害者程度等級を参照して身体障害者手帳等級に変えた。

## (2) 調査について

- ・調査期間：2015年8月から10月
- ・面接場所：大学など対象者の都合の良い場所にした。
- ・所要時間：50～60分程度の半構造的面接
- ・質問項目：以下の通りである。

①プロフィール 内容は、年齢、性別、聴力 (dB)、人工内耳の有無、家族に聴覚障害者がいるかどうか、就学前・小中学校の教育歴、高校の設置者 (国立、私立、公立、中高一貫校)、現在の状況である。
②「友人との関係」
③「先生との関係」
④「学習 (授業)」
⑤「障害認識」
⑥「家族の存在」
⑦「もし高校の時にこのような支援や環境があればよかったと思うことがあるか」
⑧「他になにかありますか」(自由)

上記の8項目について質問をした。高校の時を振り返ってもらって、学校生活の様子について協力者の思うままに自由に話してもらった。そのため、すべての質問項目の回答を得たわけではない。さらに、高校での聴覚障害児への支援の在り方を検討するために、インテグレーションを経験して、高校を卒業して振り返って今だから考える「もし高校の時にこのような支援や環境があればよかったと思うことがあるか」を加えた。

・コミュニケーション方法：調査対象と一番スムーズなコミュニケーションが行える手話によって行った。調査対象者の主なコミュニケーションは手話であり、声を併用した人もいた。

### ・記録について

面接の様子は、対象者の許可をもらってビデオカメラにて録画した。録画の際に、録画したビデオは本論文以外には使用はしない、筆者以外に見せないことを説明して承諾を得た。個人情報の取り扱いには気を付けた。

協力者ごとに録画したインタビュー調査のビデオを文字データに書き起こした。手話で話している内容を原則そのまま書き起こしたが、理解を深めるためにも意味が変わらない程度に言い換えたり、話の順序を変えたりした部分がある。

## (2) 結果

### ①「友人との関係」について

- ・「1対1でのコミュニケーションであれば、手話や指文字が出来る友人と話せた」(EさんFさん)
- ・「手に書いたり空書きしてもらった」(Cさん)

- ・「口話をゆっくり」(Fさん)
- ・「3人以上の会話になるとついていけなくなる」(BさんCさんDさんEさんFさん)
- ・「何を話しているかを聞くことに関して、楽しそうな雰囲気がありそれを壊すのが嫌だ」(CさんDさん)
- ・「私は黙って見ている」(Fさん)
- ・「高2から(みんなに合わせて)笑わなくなった」(Fさん)
- ・「適当にうんうんと言っていた」(Bさん)
- ・「友達はあまりいなかった」(Bさん)、
- ・「手話を使わない友達と話すときうまくいなくて勝手に涙が出た」(Eさん)

## ②「先生との関係」について

- ・「板書をたくさんしてくれて、私だけではなくみんなが分かりやすいような授業にと工夫してくれた」(Cさん)
- ・「担任の国語の先生が、ときどき私が暗い顔をしていると大丈夫？放課後あいている？と聞いてくれた。そのときは筆談で話していた」(Cさん)
- ・「(歴史の先生は)ものすごく優しく分からないときは、昼休み時間すべてを使って教えてくれた」、「障害のある人たちに理解がある先生(がいた)」(Dさん)
- ・「手話が出来ない担任も手話を覚えてくれた」(Eさん)
- ・「先生から大丈夫？と聞いてくれた」(Fさん)
- ・「(先生のおかげで)将来先生になろうかなと思った」(Dさん)
- ・「先生のおかげで友達作りが出来た」(Eさん)
- ・「聞こえないから先生の話や声聞きにくくて、配慮をお願いしますと言ったら(先生が)あなたはしゃべれるから(配慮しなくても)大丈夫でしょと言われ、何度も説明したけれど通じなかった」(Dさん)
- ・「(聞こえないから)もういるだけでいいよ」(Eさん)
- ・「生物の先生は全部声だけで分からなかった」(Eさん)

## ③「学習(授業)」について

- ・「口をはっきりとゆっくり話す(ようにお願いした)」(全員)
- ・「聴覚障害生徒のほうを見て話す」(全員)
- ・「板書を多めに書く」(全員)
- ・「英語のリスニングをスクリプトで渡す」(全員)
- ・「だからなんとなく分かる状況で、6,7割分かった」(Aさん)
- ・「ほとんど分からなかった」(Bさん)
- ・「聞こえないから授業をちゃんと聞いたことがない」(Bさん)
- ・「独力で教科書や参考書などで勉強する」(AさんBさんDさんFさん)

- ・「大学進学後、情報保障を受けて高校まで受けていた授業の情報量が少ないことが分かった」(CさんDさん)
- ・「手話で話せるところは手話で、難しい場合は板書を多めにと配慮をしてもらった」(Eさん)

#### ④「障害認識、障害受容」について

- ・「障害を受け入れられたきっかけ（は聴覚障害を持つ）お兄ちゃん存在が大きい」(Aさん)
- ・「ろう学校に遊びに行くことが多かった」(Aさん)
- ・「聞こえないってそこまで悪いことではないなと思っていた」(Aさん)
- ・「お兄ちゃんは同じ聞こえない人だから僕の悩みを聞いてくれたことがある」(Aさん)
- ・「聞こえないことを誇りに思っている」(Eさん)
- ・「生きていても仕方がないと思っていたことも多く、自分が嫌だった」(Bさん)
- ・「聴覚障害について少しでも知っている人がいれば何か変わったんじゃないかなと思う」(Bさん)
- ・「自分自身は聞こえないと思っていなかった」(AさんFさん)
- ・「Bちゃんは他の子と違うから遊びたくない」と言われた経験がある。(Bさん)
- ・「聴力が下がってきて障害を認識した」(Cさん)
- ・「聞こえないのは当たり前」(Eさん)
- ・「高校時代の授業の一環で聴覚障害について調べようと思い、そこから自分の障害について理解を深めた」(Cさん、Fさん)
- ・「(難聴学級は) コミュニケーションがとりやすくてよかった」(EさんFさん)

#### ⑤「家族の存在」について

- ・「両親から指文字や手話を使ってもらっていた。」(AさんDさんEさんFさん)
- ・「両親と話していて分からないときは指文字で言ってくれた」(Aさん)
- ・「母親が指文字と少しの手話が出来る」(Dさん)
- ・「母親は小学校4年生の時から手話を覚え始めた」(Fさん)
- ・「家でたくさん話してすっきりできる」(Eさん)
- ・「母が手話で話して、私は口話で返している」(Fさん)
- ・「指文字を使って会話をしていた」(Dさん)
- ・「理解しようと頑張ってくれるけど、結局は聴者だからろうの気持ちが分からない」(Aさん)
- ・「(母親に) 言っても何も助けてくれない」(Bさん)
- ・「家族に対して障害の悩みを言うことは無理、言っても分からないから困るだけ」

だから障害に関して言ったことがない」(Fさん)

- ・「(父親は) 仕事で忙しいから私が聞こえないことについてもあんまり関わりがなかった」(Bさん)
- ・「(父子家庭のため) 複雑な家庭」(Cさん)
- ・「(単身赴任が長かったため) 父親は微妙」(Dさん)
- ・「父親は何も考えていないと思う」(Fさん)

⑥「もし高校の時にこのような支援や環境があればよかったと思うことがあるか」について

- ・「情報保障を受けて高校まで受けていた授業の情報量が少ないことが分かった」(CさんDさん)
- ・「たった一人のためにというのは抵抗を感じる」(Aさん)、
- ・「まわりに見られるから怖い」(Bさん)
- ・「自分だけというのは恥ずかしい」(Dさん)
- ・「情報保障は知らない」(CさんEさんFさん)
- ・「自分で勉強していたから知らない」(Fさん)
- ・「(特別支援教育コーディネーターは) 聴覚障害の対応や理解、啓蒙、他の先生に広めたりといろいろなことが求められている」(Cさん)。
- ・「(先生に求める配慮に関して) どのような方法があるのかということが分からなかった」(Bさん)

⑦「他にになにかありますか」で出た内容について

- ・「自分の障害をはっきりと伝えることと必要なサポートを伝えること(がインテグレーションする上で必要)」(Aさん)
- ・「理解してくれる人は絶対いるから、難しいけれど悩みとか苦しいことを誰かに言った方がいいと思う」(Bさん)
- ・「手話に早く出会ってればよかったと思う。障害認識ももっと深まっていたなと思う」(Cさん)
- ・「ろう学校の人も普通学校の人もお互い仲良く出来たらいいな」(Cさん)

### (3) 考察

- ①友人との関係に関して、コミュニケーションにおいては、教員の介入は難しく、聴者生徒本人の理解や配慮の影響が大きい。高校時代は「おしゃべり」が楽しい年ごろであり、小学校低学年のように遊びを通じた人間関係形成が難しく、さらに大人に近づいていく高校生の会話は早くなり、難しい単語が出るため、相手の口の形や音声を聞いてすべての内容を理解するのは重度難聴の聴覚障害生徒にとってはとても厳しいと考える。

- ②先生との関係に関して、聴覚障害生徒が一生懸命説明してもないがしろにされたり、声だけで話すと言った音声を主なコミュニケーションとしている聴覚障害生徒の特性の理解のなさといった先生の配慮のない関わりも課題であった。「話せるから聞こえているのではないか」という聴覚障害に対する誤解をなくするために教員が正しい知識を持ったり、知識だけではなく聴覚障害生徒がいる授業での工夫ができるように、教員への理解啓蒙が必要となる。中学校や高校の教員免許を取得する際に科目として、障害や特別支援教育について学ばなければならないという設定がない。そのため、障害について知らない教員が多い。これからインクルーシブ教育を推進するためには、通常の学校で学ぶ障害児が増えることを考え、通常の学校の教員に対して研修や学習会などで特別支援教育について学ぶべきである。
- ③学習（授業）に関して、通常の高校に通っている聴覚障害生徒のほとんどが行っている「読唇法」といった先生の口や声を見たり聞いたりして授業を受けることには限界がある。聴覚障害生徒が、自分の状況に気づいていない場合が多いので、教師に対して支援を促すサインを出すことが少なく、その結果、どういった時に支援が必要であるのかということ教師が気づかなかったり、分からなかつたりする（美濃・鳥越，2007）。
- ④障害認識や障害受容に関して、Bさんのように障害に対して悩んでいる聴覚障害生徒に対して、カウンセリングやソーシャルワークなど聴覚障害に応じたサポートが必要である。自分の障害を認識していないまま育ったりある出来事により障害を認識したりと様々であり、本人の性格や環境が大きく影響することが考えられる。CさんとFさんのように高校時代の授業の一環で聴覚障害について調べようと思い、そこから自分の障害について理解を深めたという経験があったように、通常の学校で学んでいる聴覚障害生徒の場合は自分から動かない限り、聴覚障害について理解することが出来ない。そういった意味で高校時代にも、難聴学級や通級による指導において障害について学習する必要性があるだろう。難聴学級の存在について、Fさんのように、Eさんと出会って聴覚障害について考えるきっかけとなり、聴覚障害を持つ友人と出会う場として重要である。
- ⑤家族の存在に関して、聞こえる子どもも同じ事だが、父親は仕事が第一のため子育てに関しては母親が関わる割合が大きい。だが、聴覚障害児の場合、聞こえる子どもより子育てが大変な部分があり母親一人で抱え込んでしまう部分がある。父親にも手話を覚えてもらったり、ろう学校や保育園・幼稚園などに送り迎えを担当したりと積極的に子どもに関わってもらえるよう国としても学校としても支援する必要性がある。日本には、介護・育児休業法があり、育児のために仕事を休むことが出来るが、男性は2.03%という低い取得率のためなか

なか休まない現状である。よりより親子関係を築くためにも父親の参加は必要であると考える。

- ⑥高校のときにどのような支援や環境があればよかったかに関して、ほとんどの人が高校において情報保障といった特別支援を受けたいと思っていなかったことがわかった。40人1クラスの中でたった一人の聴覚障害生徒のために特別なことをされるのは抵抗を感じているようである。しかし、CさんとDさんのように大学時代に情報保障を受けて高校時代に得られた情報量が少なかったということに気づいており、聴覚障害生徒が周囲の協力を得られた上で情報を得ることができるように支援をすることが望ましいのではないかと考える。
- ⑦他にでた回答に関して、インテグレーションには聞こえる子どもとともに学べるというメリットがあるが、デメリットとして、同じ障害を持つ子どもに出会えないことが挙げられる。同じ障害を持つ子ども同士の交流が必要であり、同じ障害も持っている人がたくさんいるという安心感が必要である。だが、通常の学校で学ぶ聴覚障害児は音声日本語で育ち、ろう学校にいる聴覚障害児は手話で育つため、両者が関わるのが非常に難しい。そういった意味で小学校段階から両者が交流できる場があると良いのではないかと考える。「聾学校が、[中略]、高等学校（小学校や中学校も含めて）の大きな生徒集団の中で個々に孤立している聴覚障害生徒を互いに結び付け、聾学校で学んでいる生徒ともつながりを作りながら、聴覚障害者としてのより大きな集団を形作る活動も求められていく」（中野・根本，2008）。

#### （4）最後に

今回、聴覚障害者に高校時代についてインタビュー調査をして、通常の高校で学ぶ状況から生じる困難さが明らかになった。一人ひとりが聴覚障害があることにより、悩み、苦しみを経験していた。友人や先生からの配慮によって良かったこともあれば、逆に理解のなさ、配慮のなさから大変な思いをしていたことが分かった。通常の高校で聴覚障害生徒が学ぶためには、周囲の理解や配慮が大事であり、それによって聴覚障害生徒の学校生活の質が変わる。インクルーシブ教育理念の下で進められる特別支援教育や障害者差別解消法の施行と、障害のある生徒を取り巻く環境は変わっているが、高校に関して聴覚障害児を対象とした特別支援学級や通級による指導といった特別支援教育制度が整っていないことが課題である。これから高校で学ぶ聴覚障害生徒のためにも、充実した環境で学ぶことができるようになることを願う。一人ひとりの聴覚障害生徒が学ぶ権利を保障するためにも強く思う。



#### 〈引用文献・参考文献〉

美濃孝枝・鳥越隆士（2007）「インテグレーションをしている聴覚障害児童・生徒に対する支援のあり方に関する調査—本人の語りからの分析—」『ろう教育科学』49（2）：pp.47-66

鷺尾純一（2002）「インテグレーション環境で学ぶ聴覚障害児・者への教育的支援」『特殊教育学研究』39,（4）:pp.91-97

中野善達・根本匡文（2008）『改訂版聴覚障害教育の基本と実際』 田研出版